



体に良い食事と「おだし」学ぶ につこりと親子食育講座

安原地区公民館親子食育講座が6月23日、だしソムリエ協会認定講師の金子美子さんの指導により開催されました。小学生の親子を中心に13人が体によい食事と「おだし」について学びました。

まず金子さんが昆布と鰹節、昆布と煮干しで丁寧に取った2種類のおだしを味わいました。参加者は皆、感動

的なおいしさにつこりしました。金子さんによると、自然の旨味は、舌と胃で感じ、脳が満足するため、食べ過ぎや塩分の取りすぎ防止になるのだそうです。

実習では、五分づき米を炊き、素材本来の味を生かして砂糖を使わないちらし寿司を作りました。お湯を注ぐだけでみそ汁になる「みそ団子」や、

豆腐、よもぎ、いちごを練り込んだ3色の白玉だんごも楽しく作りました。家庭料理はおいしく、健康に良く、手軽に効率よく栄養を摂れることが大事と、野菜の切り方、火の通し方などを具体的に教わりました。

参加した親子は「料理を見直す良い機会になった。家でも応用して作りたい」と話していました。



金子さんからお米のとき方を教わる子どもたち

満蒙開拓平和 記念館で学ぶ

安原地区公民館で学習を続ける歴史研究会（矢野喜世登会長）は6月20日、下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和記念館と、上伊那郡飯島町の歴史民俗資料館「飯島陣屋」を訪れ、戦前から戦後に至る旧満州（現・中国東北部）の歴史などを学びました。

会員や地域の人たち合わせて18人が参加しました。記念館は満蒙開拓団に特化した全国唯一の施設として知られています。

一行は開拓団の住居をイメージ再現した建物や写真、義勇軍に参加した少年が家族にあてて書いたはがきなどを



学芸員の説明に耳を傾ける参加者たち

つぶさに見ました。教え子を義勇軍に送り出した教師の悔恨の情などを静かに語るガイドの説明に、熱心に耳を傾けていました。

パンとスイーツ 講座がスタート

安原地区公民館主催のパンとスイーツ講座が5月25日、年間5回の予定でスタートしました。講師に高梨雅子さんを迎え、受講生13人が希望に応じたパンやスイーツづくりを学びます。

開講式で、初めに高梨さんから「大勢の方の参加をいた

だいて幸せです。これから5回はパンとスイーツの両方一緒にやっていきたい。何をやるかは、皆さんの希望に応じてやりたいので、皆さんからのご意見をいただき「と挨拶がありました。初めて講座に参加した小池美樹さんは「昔作った



ことがあるが、忘れてしまったかなか作れない。二人の子どもたちに作ってあげたいのでしっかりと学びたい」と言っていました。講師の高梨さんは、50歳のときにパンやケーキづくりの講座に2年間通い勉強を始め、二十数年が過ぎ、自宅に工房を作って、技術を磨いています。今年度は、城北公民館でも

講座を開いて教え、安原地区福祉ひろばのお茶カフェの監修もしており、相談やアドバイスを受けています。今回は「いちごムース」「くるみパン」を作りました。調理室では「パンが先で発酵している間にムースを作りましょう」と先生の声。手順を聞いたり、要点を書き留めたりして、和気あいあいと大きな笑い声が響いていました。

参加者たちは「満蒙開拓に赴いた人々がいたからこそ平和な私たちがいる。歴史を風化させてはいけないと思いましたが」などと感想を述べていました。

小雨の中春季球技大会 育成会員のアイデアも

安原地区春季球技大会（子ども会育成会主催）が5月13日に小雨の降る中、旭町小学校校庭で開催されました。約150人の子どもたちが低学年、高学年それぞれ4チームに分かれ、ドッジボールのリーグ戦が行われました。

「よろしくお願いします！」と、グラウンド中に響き渡るほどの大きな声で試合開始のあいさつをする子や、ボールに背を向けたままコート内を必死に逃げ回る子、右手でボールを持ち、投げる前に左



ドッジボールを楽しむ子どもと見守る保護者

手でカッコよく標的を狙い定める子など、子どもたちのいろいろな姿が見られました。

校舎の前には町会ごとにブースが作られ、カラフルな対戦表の前では子どもたちの「勝ったー」「疲れたー」という声と、「がんばったね」と笑顔で応えるお父さん、お母さんの声であふれていました。

今年の球技大会では初めての試みとして、子どもたちの手首にビニールテープで作られたリストバンドが付けられました。そこには自分のチーム名と試合の開始時間が書かれていて、一日に何度も試合に出る子どもたちが自分の試合時間を忘れないようにと、子ども会育成会の役員がアイデアを出しあって作ったとのことでした。

子どもたちが楽しみにしている大会がスムーズに進行するようにとの思いが伝わる球技大会でした。



小雨に負けず球技に熱中する子どもたち

いちよう並木

夏の花木

百日紅（ヒヤクジッコウ） 暑さに負けずに咲き誇る百日紅（ヒヤクジッコウ）、徳川時代に中国から渡来した落葉高木です。

木肌が滑らかで「猿もすべる」という意味からサルスベリとも呼ばれ、花期が長く百日紅（花）が続くところから百日紅の名がつけられました。

枝先に丸い玉のような蕾が集まって、散れば咲き次から次と楽しむことができます。

1個の花は6弁で、多数のおしべが美しいです。花の色も千差万別、不思議な点は種を蒔いても親株と同じ花は株は挿し木で増やします。

新しい枝に花芽がつくので、丸坊主に剪定します。ワタカイガラムシの寄生を防ぐため、石灰硫黄合剤を刷毛で塗ります。



戦争の記憶を宿した赤レンガ倉庫 北門近くに案内板がある

信大キャンパス 探検隊⑥

安原地区公民館

赤レンガ倉庫

松本キャンパスの木陰に鍵つ旧陸軍歩兵五十連隊の糧秣庫。ツタが這うようにのびる外壁の風情から「赤レンガ倉庫」と呼ばれています。平成24（2012）年8月、国の有形文化財に登録されました。

レンガ造り平屋建て約

330平方メートル。兵や馬などの糧食を保管する建物として使われました。兵営や憲兵の屯所、陸軍病院などとともに連隊が置かれた明治41（1908）年ころに建てられたとみられます。

五十連隊の平時編成は1200人でした。昭和2

（1927）年、南満州（現・中国東北部）に進駐します。満州事変をきっかけとした戦火は、中国大陸全体に広がり、太平洋戦争へと突入。編成は平時の2倍に膨れ上がり、中

国や南方諸島へと動員されていきました。満州事変以来の戦死者は4757人にのぼると伝わります。

近代的キャンパスでひとときわ異彩を放ちます。説明板には「戦争の記憶を現代に伝えるだけでなく、本学によって教育的にも利用され、時代を通してさまざまな人々の活動の場となってきた」と記されています。

